

夏場を迎えるに当たり、暑熱対策をしっかりと!!

畜産農家のみなさんは家畜の暑熱対策をいつから開始していますか？5月くらいからしているよ、という方も多いかもかもしれません。

家畜にはそれぞれ臨界温度というものがあります。これは、これ以上の温度だと生理的な調節機能に変化が起きる温度のことです。例えば、口を開けて呼吸する、食欲が低下するなどです。乳牛で25℃、肉用牛で30℃、豚で27℃、採卵鶏30℃、肉用鶏28℃、羊では25℃が臨界温度とされています。大まかに言うと家畜は25℃前後から暑熱ストレスを感じ、30℃以上の気温では生産性が落ちるといえることです。

例えば東近江市では、例年の平均気温が25℃を超えるのは7月ですが、最高気温が25℃を超えるのは5月中旬です。最高気温が25℃を超える時期には家畜は暑熱ストレスを感じ始めていますので、暑熱対策の準備はそれよりも少し前の4月から準備をしていただきたいと思います。

国際的な報告（気候変動における政府間パネル IPCC 第5次評価報告書 2013.9）による地球温暖化の将来予測は、1986年から2005年を基準とすると、2016年から2035年は年平均気温が0.3～0.7℃の上昇であるのに対して、2081年から2100年には2.6～4.8℃の上昇が予測されています。60年後の話でしょ？と思った方もいるかもしれませんが、年平均気温の話なのでこれよりも暑くなる年もあるということです。例えば、直近の東近江市の年平均気温は、2009年が14.5℃、2010年は14.9℃と0.4℃上昇して

います。ちなみに、昨年の2019年は15.2℃でした。傾向をみると、確実に気温は上昇しています。2010年は夏季（7～9月）の家畜の暑熱による被害が多かった年でもありますが、記憶に残っていますでしょうか？また、同報告書によると21世紀末には、真夏日は現在よりも約25日、猛暑日も8日の増加が予想されています。真夏日は最高気温が30℃を超える日で、猛暑日は最高気温が35℃を超える日を言います。考えるだけでもゾッとします。

暑熱対策はどの畜種でも畜舎の屋根に遮熱塗料（白色系塗料）を塗布する、寒冷紗などの日よけの利用、送風や換気、飲水確保、飼育密度の低下などがあるかと思います。湿度対策も牛では重要な暑熱対策となります。ここでは詳細は省略しますが、対策の具体的な方法を知りたい方は、各畜種担当までご相談ください。最後に、暑熱対策は家畜だけではなくありません。我々も熱中症対策など暑さ対策をしっかりと頑張りましょう。

（諸岡）

